

2011年度学校自己評価

はじめに

2011年度は創立30年目であり、全ての生徒が入学時から男女共学の学院生活を送る初めての年、また本学院創立時の校舎で授業を行なう最後の年という、さまざまな意味で節目の年であった。本学院教職員は新校舎建設・移転にともなう業務をこなしながら教育・研究活動を展開した。現制度で4度目となる11年度の学校自己評価は、10年度と同様、まず各専任教員が、生徒による授業評価、保護者の本学院の教育に対するアンケート等を参照しつつ、授業、卒業論文、クラブ活動、研究状況・業績等についての評価を行ない、さらに本学院内の教務室、各委員会、各学年、事務所等の部署がそれぞれの活動の評価を行なった。そしてその上で、学校評価運営委員会がそれらを教育活動、生徒、研究活動、教育研究施設、社会・大学との連携、管理運営の6項目にまとめた。本自己評価が12年度以降の新校舎での教育・研究の改善に資することを望むものである。

I. 教育活動

①授業

a. 必修科目

11年度の必修科目の授業は、10年度の生徒の授業評価等を分析・検討した上で計画が立てられた。各教員は、特に1年次の必修科目では中学校の内容との連続性を意識しながら授業を展開し、基礎学力の増進と教養の涵養につとめた。

具体的には「音楽」では音楽を通して自己解放や自己表現をすることを目標に授業を行ない、「国語（現代文）」ではワークシートを利用することで生徒の主体性を高める工夫をし、「英語」ではShadowingを導入して発音能力の向上を目指した。また「国語（古典）」では歌舞伎座鑑賞教室（国立劇場）やビデオによる歌舞伎・狂言の視聴を通して古典芸能の奥深さを伝えることも試みた。

個々の生徒の能力に差があることは事実であるが、それに対して「体育」では不得意種目の個人指導を行ない、「英語」では特にI選抜で入学した生徒と他の生徒の英語力の差に配慮した授業を行なった。

東日本大震災は授業内容にも影響し、「化学」で原発事故を考慮して椎茸栽培を中止し、「地理」では自然地理学分野に重点を置いた授業を行なった。社会の変動に対応しつつ、時宜をとらえた教材選択は必須であろう。

b. 選択科目

第3学年の授業時間数の約半数が選択科目であり、生徒は7講座（14時間）を選択することになる。11年度に開講した講座数は、人間科学部提供のオンデマンド科目を含めて95講座であった。当初105講座が用意されたが、10講座は規定の受講生（SSH科目は5名以上、その他の科目は10名以上で開講、オンデマンド科目は規定なし）が集まらず、開講されなかった。逆に募集定員を大きく超える受講希望者が出たため、抽選で受講生を決めざるを得なかった科目も多くあった。生徒への広報の改善と生徒の希望がかなえられる体制の構築が必要であろう。

多くの選択科目は学部進学を見すえて授業を行なうことになるが、英語科目の一部では学部レベルの力をつけることを目標に授業が行なわれ、理系科目では学部教育に対応できる学力の養成と個々の学問への興味喚起をはかった。例えば「微分方程式入門」は学部レベルの授業を行なった。

また「英語コミュニケーション」では、バイリンガルの生徒が半数近く受講したが、GITSの留学生をコメンテーターとする学内公開授業を行ない、「法学基礎演習」では法務研究科の法廷教室で裁判員模擬裁判を行なうなど、大学と連携した授業も行なわれた。また

「倫理」では一次資料を多く読むことを主眼に、「食文化」では生活感を学ばせることなどを意識して授業を進めた。さらに受講生が10名～20数名の講座では生徒の口頭発表を取り入れる講座も多く、当該講座の知識を増大させるとともに、プレゼンテーション技術の向上にもつながっている。ただネット情報を安易に利用するような発表がまま見られることは問題である。

c. 卒業論文

331名が提出した。卒業論文のための時間が設定されていないなか、各指導教員は放課後や夏期・冬期の長期休暇中や放課後にゼミを開催したり、Eメールを頻繁に利用したりして指導を行なった。また論文リテラシーの指導を重視した教員もいた。その結果、ユニークなテーマ設定で高いレベルの論文が提出された。平均点は77.3点（100点満点）で、例年と大きな差はなかったが、学院賞受賞者はなく、特に秀でた論文がなかったことは残念である。

教員側の問題点としては、教員の専門外の分野の場合指導が困難であること、20名の生徒の指導をする教員がいて、指導が不足するだけでなく他の業務に支障が出ることもあること等が挙げられる。また生徒の問題としては、卒業論文を軽視する生徒や卒業論文に本格的に取り組む始める時期が著しく遅い生徒がいること等が挙げられた。また何が盗作にあたるのかの理解度が低い生徒も見られた。改善が求められる。

d. 卒業論文報告会

2月18日（土）に開催した。この報告会の目的は2つある。1つは次年度に卒業論文を執筆する2年生に対して卒業論文を意識させ、できるだけ早期から作業を促すことである。もう1つは論文とレポートとの違いを認識し、3年生の執筆過程を参考に、自ら研究計画を立てられるようにすることである。当日は、前年と同様に、本学院生3名と慶應湘南藤沢中高等学校生1名が報告した。

本学院側からの報告者3名は、進路指導委員会で選定した。選定にあたっては、次の2つを基準とした。1つはフィールドワークや実験・観察など自分でデータを集めた努力の成果が滲み出てくる作品であること。自らが得たデータで実証的に明らかにする手続きが、生徒にとってより理解しやすいと考えたからである。もう1つは内容がプレゼンテーション向きであり、2年生に聴かせるに値する作品であること。身近な話題の中にも論文の題材となりうる事柄があるということを示し、プレゼンテーションの際の様々な技法の参考にもなりうると考えたからである。例年は自然科学、人文科学、社会科学の各分野から、それぞれ1作品ずつ選出していたが、11年度はそれにとられることなく、比較的自由に選出した。その結果、自然科学2件、社会科学1件（以上、本学院生）、人文科学1件（慶應生）という構成となった。報告会当日の会場の運営は3年生3名が行なった。

報告された卒論はいずれも労作であったため、2年生にとってはややハードルが高く感じられたようである。しかしながらほとんどの2年生が静かに聴いており、報告者の選定は適切であったと考える。卒業論文のテーマ登録と近い時期での開催を臨む意見もあるが、論文を初めて書く生徒にとっては、労作の報告を聴くだけでも有益であろう。

②課外教育

a. 早慶野球戦観戦

5月28日（土）に東京六大学野球春季リーグ戦早慶1回戦を観戦した。毎年1年生を対象として行なっている行事であるが、11年度は次の3点を目的とした。①早稲田大学への帰属意識を持つ。②早稲田大学の新しい伝統づくりに、一人の学院生としてどんな役割を担うのかを考えるきっかけとする。③同じ目的をもって応援することによって学院生の絆を深める。当日は雨天であったが、現地での集合はスムーズであった。生徒たちは雨具をまといながら必死に応援し、充実した時間を過ごしていた。当初の目的は達成できたと思われる。

b. 体育祭

6月9日（木）に学校行事の一環として、体育行事実行委員の生徒が中心となり実施した。

男女共学化以後、種目・出場人数等変更を行なってきた。しかし特に3年生のSSHクラスについては、女子の生徒数が少なく、1人の生徒が多数回出場することになった。生徒数の少ないクラスに合わせると、出場できない生徒も出てくるという問題も起こり、悩ましい所である。また団体競技においてルールの周知が徹底されていない等の課題が見られる。30回記念として生徒企画コスプレ大会は盛り上がったようだ。10年度の反省に基づき出場選手数を調整し、運営はうまくいった。

運営等教員が関与しなくてはならない点もあり、また生徒たちのアイデアを取り入れることによる予定時間超過もあったが、クラスのまとまりは高まり、クラス経営にも多いに役立った。

c. 球技大会

第3学年の修学旅行期間の10月4日(火)に、1・2年生で行なった。種目は男子はサッカー・ソフトボール、女子はバレーボールで、学年別・全員参加で行なった。男子はサッカー部・野球部(審判)の協力で運営もスムーズに行なうことができた。しかし女子バレーボール部がないため実行委員が審判にあたったがうまくいかず、教員が審判をせざるを得なかった。全般的には男女とも盛り上がり、クラスのまとまりも見られた。

d. 人権教育

3年生の修学旅行期間の10月5日(水)に、本庄文化会館において人権教育講演会『「夜回り先生」水谷修氏講演会』を開催した。水谷氏は60分という短い時間であったが、1・2年生に向けて、氏が関わってきた高校生や若者の事例を多数挙げ、「夜の世界」の現状を話した。生徒は終始熱心に聞き入っており、個々の命の尊さ・素晴らしさを、氏からのメッセージとしてしっかり受け止めたと思われる。

e. 秋の学年行事

第3学年の修学旅行期間の10月6日(木)に1年生は信州小諸散策と果物狩りを行なった。クラスごとに果物狩りの内容を選んだが、7クラスがリンゴ狩り、1クラスがぶどう狩りであった。秋の1日を楽しく過ごし、クラスの親睦を深めることができた。

f. 稲稜祭

10月29日(土)、30日(日)に開催した。両日合わせた学外からの来場者は約2800名であり、10年度と比べ約600名増加した。

運営は生徒会執行部(7名:会長・副会長・書記・会計)と稲稜祭実行委員会(48名)が担当した。発表・展示の内容は、学院生企画・同窓会企画・ホームホスト会企画・生協食堂に分かれるが、そのうち学院生企画はクラス企画・公認団体企画・有志団体企画・校内装飾・モニュメント・大教室・中庭ステージ企画・ホーム生による模擬店で構成された。運営面については、新たなものとして、同窓会企画が加わったこと、食品企画を食堂に集めたこと、校内装飾に新たなルールを設けることで、中庭装飾の統一感を保てたことなどがあげられる。12年度は新校舎に移転後の最初の年になるので、旧中庭ステージの設置場所、掲示物の貼り方、ペンキ類使用等について新たに検討していく必要がある。

g. 芸術鑑賞教室

11月9日(水)に本庄市民文化会館においてNOEL企画・サクソ奏者太田剣氏によるジャズ演奏を鑑賞した。音楽のジャンルの違いに関して、演奏をまじえながら説明を聞くことができた。ジャズを含めた様々な音楽を楽しむきっかけになってくれることを期待している。

h. マラソン大会

12月15日(木)に行なった。10年度は新校舎建築工事に伴い中止になったため、2年ぶりの開催であった。また同じ理由で距離を短縮して実施したが、事故もなく行なうことができた。従来と異なり、女子を先にスタートさせたが、そのため男子の先頭が女子に追いついて

しまった点、本庄早稲田駅の南の道路を横断しなければならない点等、12年度での検討が必要になった。生徒は自分の力を十分発揮してくれたと思われるが、見学者の扱いに課題が残った。

i. 課外講義

11年度は課外講義の一層の充実を企図した。10年度と同様に、1年生には「心の健康について」、2年生には「喫煙・飲酒・薬物乱用予防について」、3年生には「セクシャルヘルス～エイズ・性感染症予防について～」の健康教育講演会を実施した。

また、サマーセミナー、学部説明会、ウインターセミナー、さらにSSHプログラムによる課外講義を実施した。特に、SSHプログラムの一つとして「南極教室」を実施し、生徒・教職員73名が参加した。南極昭和基地と本学院をTV会議システムにより中継し、観測隊員と直接話をした。観測隊員は学院生の質問に一つ一つ丁寧に答えてくれて、大変好評であった。なお「南極教室」の様子は、本庄ケーブルテレビでも放映された。

その他「NEC工場見学」も実施したが、スマートフォン等の生産ラインを見学し、「高校で学んだことが仕事のどんなところに活かしているか」をテーマに、エンジニアの方から講義をしてもらった。将来の職業を考えるよいきっかけにもなった。

③課外活動

a. 生徒会活動

生徒会の主な活動は、生徒会予算作成、諸活動の企画・運営であるが、具体的には生徒総会の開催、国内外交流プログラムへの参加であった。生徒会役員選挙が例年通り11月に行なわれたが、副会長・会計には定数各2名に対し1名ずつしか立候補者がおらず、補欠選挙を行なう必要が生じている。今後、生徒に対し生徒会活動をさらにアピールし、活発にしていける必要がある。

b. クラブ活動

10年度と同様、文化部門25、体育部門17のクラブが活動した。クラブの活動目的は心身の成長を目指すもの、上位の大会を目指すもの、稲稜祭での発表に力を注ぐもの、部員の親睦を図るものなど異なるが、各クラブはその目的によって活発に活動した。

大会での上位の成績を目指すクラブの11年度の主な成績は次の通りである。

ディベート部	ディベート甲子園関東甲信越支部大会準優勝・全国大会出場
ブラスバンド部	埼玉県北部大会銅賞
サッカー部	埼玉県大会ベスト8
スキー部	インターハイ・国体・全国高校選抜大会出場
ソフトテニス部	関東大会・インターハイ出場（女子・個人） 埼玉県私学大会準優勝（男子・団体）

野球部	埼玉県大会3回戦進出
ラグビー部	埼玉県大会ベスト8
陸上部	関東大会出場・全国都道府県駅伝出場（個人）

学内や地域での活動を主な目的とするクラブの11年度の主な活動は次の通りである。

化学部	ダイヤモンドの合成
茶道部	稲稜祭野点茶会
政治経済部	セブンハイスクールサミット（本庄市人材育成事業）参加
落語研究会	稲稜祭ステージ・近隣の病院でのステージ

④国内外交流

a. 修学旅行

10月3日（月）から8日（土）までの6日間、3年生が3コースに分かれて実施した。各コースの参加者数は北京86名、台湾94名、韓国126名であった。

北京コースは、開校以来続く北京大学附属中学との交流を軸に、歴史遺産の見学、自由行

動による研修を行なった。北大附中との交流は、授業交流とスポーツ交流を中心に行ない、意義深い貴重な時間を過ごすことができた。交歓夕食会は、11年度も、中国側が重要な試験を控えていることを理由に中止になった。代わりに、昼食時の時間を利用して、お互いに出し物を出して文化的な交流をすることができた。見学・研修については、国慶節の連休と重なったため交通渋滞が至る所で発生していたが、ホテルを出る時間を早めるなどして対応したため、比較的スムーズに行なうことが出来た。日中関係が落ち着いていた時期でもあり、現地で不安を感じることもなく、総じて良好な日々を過ごした。

台湾コースは、予定していた成田発のフライトが時間変更されたため、羽田発のフライトに変更になったが、むしろ集合が容易でまた時間の余裕もできた。旅程はほぼ10年度と同じであったが、10年度には実施できなかった高雄の見学を行なうことができた。台北では台湾大学名誉教授の何瑞藤先生の講義を受け、半日の自由行動、台中では日月潭や民族村の見学とメインの台中第一高級中学との交流、高雄では半日の自由行動であり、あつという間の旅行であった。11年度に限らず交流の日の決定が遅くなってしまう問題点があるが、Eメールのやりとりが速やかにできるようになってきたので、12年度はもう少しスムーズに準備できるのではないかと思われる。

韓国コースは、慶州・ソウルの2都市を訪問した。仏国寺などの世界遺産、統一展望台などを訪問したほか、安養外国語高等学校を訪問しての学校交流を行なった。安養外国語高校では、昨年に引き続き「希望の運動靴（途上国の子どもに贈る靴に絵やメッセージを描くボランティア）のプログラムを行ないながら、自然に交流を深めることができ、多くの生徒が非常に有意義であったという感想を述べている。韓国コースも4回目の実施となり、釜山での宿泊をやめる代わりにソウルでの滞在日数を1日増やすなどの見直しを行なった。結果として、宿泊地の移動回数が減ることでゆとりが生じ、事故や体調不良者の発生を最小限に抑えることにつながったと考えている。

以上のように、11年度の修学旅行は各コースとも満足のいく結果に終わったと思われる。生徒に実施したアンケートでも満足度の高いものであったという結果となっている。しかし、コース自由選択による人数のかたよりの問題や事前学習の場所の確保など今後に残され課題もいくつか挙げられる。12年度以降もこれらの点を考慮し計画や準備を行なう必要がある。

b. 他校との交流

11年度は東日本大震災の影響で、6月の台中第一高級中学の訪問が中止になるなど、国際交流の規模の縮小や中止が相次いだ。実施した交流は以下の通りである。

- 1) 北京大学附属中学（中国）
修学旅行における北京大学附属中学訪問。
- 2) 台中第一高級中学（台湾）
修学旅行における台中第一高級中学訪問。
- 3) 安養外国語高等学校（韓国）
修学旅行における安養外国語高等学校訪問。
- 4) ジョグジャカルタ第二高校（インドネシア）
フリーペーパープロジェクトを通しての交流と、World Youth Meeting における共同研究発表。

c. 海外プログラム参加

11年度に参加した海外プログラムは以下の通りである（SSHプログラムは除く）。

- 1) 7th International Senior High School Intelligent Ironman Creativity Contest
台湾教育部主催、創造性養成のための国際コンテストで、3日間で与えられた課題に取り組み、創造性・体力・知力が問われる。本学院は台湾政府の招待を受け、第1回から参加しているが、第7回目となる今回は、7月に開催され、生徒6名を派遣した。
- 2) World Youth Meeting 2011
日本福祉大学での国際プレゼンテーションイベントで、本学院からは毎年参加している。11年度も8月に教員1名、生徒7名が参加した。インドネシアの生徒2名と共同で「21

世紀スキル」と題し、フリーペーパープロジェクトで学んだことを中心に10分間のプレゼンテーションを行ない、審査員からも高評価を受けた。

3) 日韓高校生交流キャンプ

日韓経済協会が主催する文化や観光をテーマに市場調査やビジネスプランを作成・発表するもので、生徒1名を派遣した。

4) AIU High School Diplomats

アメリカ東海岸で、国連本部・国務省・プリンストン大学等を訪問し、ホームステイも体験するプログラムで、生徒1名が参加した。

⑤SSH (スーパーサイエンスハイスクール)

本学院は02年 (SSH元年) にSSH制度開始とともにその指定を受け、以後05年に再指定、10年に再再指定されて現在に至っている。日本のSSH校の中で最古参である。

11年度実施した主なプログラムは以下の通りである。

1) 河川調査プロジェクト

早稲田大学社会環境工学科研究室・本庄市・NPO法人・埼玉県環境科学国際センターとの連携で行なう市内河川の水質改善活動。

2) 3rd Singapore International Science Challenge (5月22日～29日)

シンガポール政府主催で2年に1度開催している国際的科学コンペティションで、3名1組で招待参加した。研究発表・工作部門・課題研究部門の3部門で勝敗を競うが、本学院は工作部門で2位を獲得した

3) Singapore National Junior College (NJC)

Waseda-NJC Exchange Programの一環として、7月に10名の生徒がシンガポールへ派遣され、National University of Singaporeやサイエンスミュージウムにおけるワークショップ、授業・実験等に参加した。また事前事後にテレビ会議も行った。11月上旬にはNJCからの生徒・教員15名の本学院に受け入れ、授業参加・国立科学博物館見学・文化交流・共同研究ミーティングなどを行った。

4) タイ短期留学

タイの高校への3週間の留学で、2名が参加した。

5) 西早稲田キャンパスでの実験教室 (7月21日)

20名が参加した。

6) 若武者養成塾 (8月1日～4日)

アサヒビール株式会社が主催する環境保護を考える高校生の合宿活動で、奨励賞を獲得した。

7) SSH全国生徒研究発表会 (8月10日～12日)

神戸で開催された全国のSSH校の発表会。

8) International Water Forum 2011 (8月21日～25日)

静岡で行なわれた「水」をテーマにした国際高校生学会であるが、1校3名で参加し、研究発表・課題研究・企業見学等を行った。

9) 原子力放射線研修会 (8月27日)

原子力・放射線に関するセミナーで10名が参加した。

10) 7th International Student Science Fair (10月10日～14日)

バンコク (タイ) で開催された、世界界の科学教育に熱心な高校が参加する大規模な国際高校生学会で3名が参加し、研究発表・講義・ワークショップ・遠足・文化交流等を行った。

11) Japan Super Science Fair (11月12日～16日)

立命館琵琶湖草津キャンパスで立命館高校が主催する大規模な国際高校生学会であり、5名が参加し、研究発表・課題コンペ・講義・遠足・文化交流等を行った。

12) 白梅科学コンテスト (12月17日)

小田原で開催され、3名が招待参加し、研究発表を行った。

13) 海洋開発研究機構研修 (12月18日～19日)

横須賀で深海の研修・水圧体験をし、講義を受講した。21名が参加した。

14) 放射線研修（2月13日）

岐阜のウラン鉱脈を中心とした放射線科学に関する研修で6名が参加した。

15) 小笠原研修（3月20日～25日）

小笠原諸島の父島・母島で希少植物の調査、海洋生物の観察を行ない、自然保護区である南島においてワークショップ等を行なった。10名が参加した。

16) 関東近県合同発表会（3月26日）

玉川大学での研究発表会で、10名が参加した。

17) 日本水産学会高校生セッション（3月28日）

東京海洋大学でのポスターセッションで、4名が参加した。

この他、本庄市市民総合講座への生徒講師派遣（2回）、子供科学教室の開催（4回）などの地域還元を行なった。

また通常枠とは別にコアSSH枠事業費を獲得し、日本・台湾両国の科学教育レベルを向上させることを目的として、12月18（日）～23日（金）に、Taiwan HSP/Japan SSH Science Education Exchange Symposium を開催し、研究発表・課題コンペ・文化交流・教員ワークショップ・遠足等を行なった。参加校は日本・台湾それぞれ11校であり、各校生徒3名、教員1～2名が参加した。この事後取材として日本校4校・台湾校1校の取材を行なった。

⑥ 高大一貫教育

a. 学部説明会

5月28日（土）に、10年度同様、大学キャンパスにおいて学部説明会を行なった。初めに2年生全員を対象に法学部・商学部・教育学部・国際教養学部の説明を受け、その後、文系学部志望は文学部と文化構想学部の説明を、理系学部志望生徒は理工3学部の説明を受けた。自分の進路を検討する際の参考になったと思われる。

10月6日（木）には本学院において、政治経済学部と社会科学部の説明会を実施した。生徒は各学部の取り組みや特徴などを聞き、学部進学の実感がわいてきたように思われる。

b. サマーセミナー

7月15日（金）と16日（土）の2日間で行なわれた。13学部（政治経済学部は政治分野1名と経済分野1名の計2名）と外部講師1名からなる15講座を設定し、各講師の専門分野の講義を行なった。1年生の世論・広報委員2名ずつが各講義の司会・進行を担当した。このことは、1年生に学院行事を広く知らしめ、学部とのつながりを意識させる非常に良い経験となっている。一方で3年生に学部進学のイメージを持ってもらうための行事でもあるにもかかわらず、参加者のほとんどが1年生であり。3年生の参加者が極めて少なかったことが問題点として挙げられる。講義内容が10年度と同様な学部があったこと、野球部の試合の応援に行く生徒がいたこと等が原因として考えられる。サマーセミナーは自由参加であるので、生徒に対して参加を強制できないが、魅力的な講義の実施や、生徒への事前の入念な告知が必要であろう。

c. 学部進学準備セミナー

2月22日（水）～24日（金）の3日間にわたって行なわれた。昨年度と大きく異なる点は、商学部の学部進学にあたっての課題を行なう時間を学院内企画として設けたことである。この背景には、商学部から前年度の商学部進学予定者の課題提出状況が芳しくないという指摘を受け、本学院が進学者を個々に指導する必要性が生じたことがある。生徒に課題を提出することの重要性を理解させ、計画的に作業させ、また教員が課題の進捗状況を把握することを意図したのである。その際、進路指導委員ではない数学科の教員に生徒からの質問に対応してもらった。その結果、例年に比べて課題への取り組みが早く、この3日間で課題を全て終えた生徒が多かった。

問題点として指摘できることは参加意識の低い生徒がおり、遅刻や欠席が見られたことである。本セミナーの目的は、学部進学への意識を高め、学部生活への円滑な移行を目指すこ

とであるが、その意識は全ての生徒には浸透していない。また一部の学部からは実施時期変更の強い要望が出されており、12年度において、本セミナーの位置付けを根本的に検討しなおす必要がある。

d. 学部開放科目

11年度は7講座に10名（1年生4名、2年生3名、3年生3名）が受講し、成績が優秀な者も3名いた。10年度までは、学部キャンパスへの移動時間の関係で、受講はおおむね水曜日・土曜日の設置科目に限定されてきたが、12年度は木曜日の6限の受講もあった。オンデマンドによる受講が4名、夏季集中講座の受講は3名あった。地理的な問題はあるとしても、さらに多くの生徒が参加するよう広報の充実を図る必要があるであろう。

e. 人間科学部オンデマンド授業

選択科目の一部として人間科学部の協力により行なわれるオンデマンド授業は、4科目が開講され、78名が履修した。学部生と同じ授業で、内容は専門性が高いが、非常に興味深く受講した生徒も多かった。オンデマンドの方法に慣れていない生徒たちにとって、画面を見ていることに限界を感じ、教員が目の前にいる方が内容が頭に入りやすいと感じている生徒がいる反面、自分のペースで何度でも繰り返し視聴することができるメリットを感じている生徒もいた。これまでに学んだことがない分野について、入門だけでも理解することができて良かった、という感想をもつ生徒もいた。

10年度の反省を踏まえ、11年度は人間科学部の教員にスクーリングの実施を求めたが、4回実施した科目と1回しかできなかった科目といった差が生じた。12年度は、スクーリングの実施回数の平準化と、半期用で作成されているコンテンツを通年用に修正してもらうことを求めたい。

⑦生活指導

本学院は、学年定員 320名という比較的小規模な学校であるということのメリットを生かし、各教員が生徒との関わりを密接にもち、個々の生徒に目が行き届くような指導体制を心がけている。11年度の指導目標（生徒への呼びかけ）としては10年度から引き続いて次の4点を意識した。

1つめは「本学院のよき伝統である、自由な校風を維持して行こう」ということ。これを達成するためには生徒の良識に裏打ちされた規律がなければならない。規律が守られない場合には責任をとる覚悟がなければ自由は維持できないことをまずしっかりと認識させるということである。

2つめは「安心・安全な学校を維持して行こう」ということ。本学院には、いじめ・暴力・器物損壊等の行為は断じてあってはならない。生徒の学校生活の安全を脅かすことになるこれらの問題行動は絶対に起こさせない。

3つめは「男女共学校のメリットを活かし楽しい学校にして行こう」ということ。男女共生の理念を洗練されたものにして学校生活を快活で潤いのあるものにしようということである。

4つめは「早稲田の学生であることを自覚し、常に自分の行動に責任を持とう」ということ。こうした心構えを生徒に説き、きちんと実行するように促した。

上記の方針を実現すべく具体的方策として、年間を通じてLHRで生徒へ継続的な指導を行なった。また課外講義として外部有識者や専門家による様々な講演を行ない生徒への啓発を行なった。そして教員組織としては、特に組主任は学年集団としてのまとまりを一層強固なものにすべく、学年集会等を通じて学年ごとにそれぞれ必要な生徒への指導を行なった。

11年度は生徒の問題行動による指導処置事例の件数は、1学期は1件、2学期は6件、3学期は1件であった。内訳は暴力行為（3件）、窃盗（2件）、定期試験・卒業論文における不正行為（3件）である。これに関わった生徒の延べ人数は、暴力行為6名、窃盗2名、不正行為3名で、10年度より増加したが、その原因は暴力行為に関わった生徒が多かったためである。

盗難や遺失物については、正式に届けのあったもので69件ののぼり、10年度の52件を上回ってしまった。このような状況は、最近の生徒の落としもの・忘れものの多さとも密接に関連していると思われる。身の回りの整理整頓、ものを大切にする気持ちなど根本的な部分について、引き続き訴えていく必要があるだろう。

II. 生徒

①生徒受入

a. 志望者と入学者

12年度入学試験は、指定校推薦の応募者も含め、入学志願者総数は2836名となり11年度より219名、8.4%増加した。男子は32名の微増であって、10年度より少なかったが、女子は187名増で過去最高の899名であった。

入学者は男子218名、女子119名、合計337名となり、募集定員320名に対する超過数は11年度より1名減少し、若干改善された。男女共学入試も6度目となり、男女定員を変更しての入試であったが、男子の入学者が過去最少、女子の入学者は過去最多となった。

b. 入学試験

一般入試、帰国生入試、 α 選抜、I選抜の入学者数の次の通りである。

	男子	女子	合計
一般入試	101	64	165
帰国生入試	17	3	20
α 選抜	61	31	92
I選抜	15	4	19
合計	194	102	296

合格者に対する入学手続者の割合、いわゆる手続率は、一般入試男子が24.9%、女子が43.9%、帰国生入試では男子が42.6%、女子が30.0%で、男女とも帰国生入試の女子を除いて11年度より大幅に上昇した。手続率の上昇が課題であったが、それは実現したことになる。ただし上昇の要因がはっきりしないことが問題であろう。

c. 指定校推薦

地元指定校推薦と一般指定校推薦による入学者数は次の通りである。

	男子	女子	合計
地元指定校	9	7	16
一般指定校	15	10	25
合計	24	17	41

11年度入試より地元指定校推薦が4名、一般指定校推薦が6名、合計10名減少した。一般指定校の数を若干減らしたことで、地元指定校の男子の応募者が減少したことが原因である。

d. 広報

本学院での学校説明会は10年度と同様3回（7月、10月、11月）開催し、また大隈講堂での附属・係属校合同説明会（7月3日）に参加した。その他出版社、新聞社、学習塾等主催の説明会に18回（21日）、海外子女教育振興財団主催の海外学校説明会・相談会に2コース（ヨーロッパ・アメリカ）参加した。国内については10年度より若干減少、国外についてはほぼ同様であった。その他、見学者を26回受け入れた。現状はほぼ適当であると思われる。

②生徒への配慮

a. 奨学金

学内奨学金の募集は、春と秋の年2回に分けて行ない、学外奨学金の案内も含め、LHRや本学院のホームページで生徒への周知を行なった。

奨学金のうち学内奨学金を受給したものは32名である。10年度に比べて3名増加している

が、これは本庄高等学院奨学金及び青木宏奨学金奨学生を各1名増やしたこと、さらに青木宏奨学金奨学生を1名臨時採用したことによる。10年度に引き続き、いわゆる「家計点」の高い、すなわち経済的に困窮している家庭が多い傾向は変わっていない。

学外奨学金には、日本学生支援機構によるもの（大学進学後の支給予約）、都道府県など地方公共団体によるもの、民間団体奨学金の3種類がある。11年度については、日本学生支援機構奨学金予約者は21名、地方公共団体奨学金奨学生が埼玉県18名、東京都2名、神奈川県2名、その他民間3団体の奨学金奨学生が5名の計48名である。従って11年度の学外奨学金受給者の合計は、48名であり、過去最多となった昨年に比べて、さらに17名もの増加となった。経済情勢の厳しさを如実に物語るものである。また授業料等軽減補助金を受けているものは、埼玉県81名、東京都28名であった。さらに就学支援金制度受給者は第1学年 346名、第2学年 324名、第3学年 315名で、合計 985名であった。

b. 保健室

保健教育として保健授業との連携を図った。すなわち保健授業「心肺蘇生法の実際」の教材としてAEDトレーナー・心肺蘇生法用ダミーを導入し、授業に取り入れることができた。今後も心肺蘇生の知識習得・実践力養成に指導用資料の導入を積極的に行なっていきたい。

保健管理としての健康診断は概ね計画どおりに実施することができた。定期健康診断結果については、学校医と情報を共有する措置も徹底することができた。また教職員健康診断は大学と連携して受診率の向上に努めた。

環境衛生は大学の施設管理課が担当したが、その結果は学校薬剤師と共有している。

医師による健康相談として、眼科・耳鼻咽喉科・歯科の学校医による健康相談を実施した。また運動クラブ活動でのスポーツ障害・外傷が頻繁にみられるため、整形外科医によるスポーツ障害相談を年2回実施したが、相談者は多い。今後も多くの生徒・教職員にこの機会を利用してもらうため、周知方法・実施時期・回数改善を図っていきたい。

救急処置については、1学期は週2日保健室2名体制の日があり、生徒の多様なニーズに応えることができた。男女共学化してから、対応に時間を要するケースが増えてきているので、今後も2名体制の日を増やし、きめ細かい対応ができるようにしたい。また食中毒の疑い事例や、感染症のアウトブレイクなどがあつた際、外部との連絡調整や状況把握のために時間をとられ、1名体制ではなかなか生徒対応ができずに苦労した。そのような面からも、2名体制の必要性を痛感した。

また、急な傷病で早退せざるを得ない生徒に対し、緊急にバス（本庄方面のみ）を出すことができたのは幸いであった。本庄早稲田駅や寄居方面へのバス運行も要望したい。

感染症の予防の点では、2月初旬からインフルエンザが流行したが、欠席状況の把握、予防の徹底に努めた。感染症発生時は学校医と連携し、情報共有しながらその指示を仰ぐことができた。しかし現在の出欠席管理方法では、状況把握に時間を要することが大きな課題である。

c. カウンセリング

毎週水曜と土曜の午後にカウンセラー（臨床心理士）による相談を実施した。1学期はカウンセラーと養護教諭とのコミュニケーション不足により、情報共有に問題が生じたが、2学期からはカウンセラーと養護教諭、保健師で情報共有する機会を設け、問題を抱えた生徒を把握し、対応することができた。

d. 学校安全管理

本学院では、盗難や喫煙等の防止のために、さらには校舎内への不審者進入に対して安全な学習環境を確保するために、教員日直制を敷いている。ただし、クラブ活動の終了時間との関連もあり、十分に機能しているとはいえない状況である。そのため校地のセキュリティについては、キャンパス管理室（太平ビルサービス）との連携がポイントとなる。特異なキャンパスの構造、すなわち、校門はおろか学校の建物を外部と隔てる物理的障壁が存在しない中で、本学院ではキャンパス内の数箇所に設置してある防犯カメラとキャンパス管理室の

警備員による巡回が、外部からの不審者進入への重要な対抗措置となる。キャンパス管理室の警備体制は、現状3名体制で、授業時は学院内外巡回、登下校時はキャンパス内通学路や生徒の動線を考慮した構内の数箇所での立・動哨警備を行なっている。しかしながら、本学院は施設・設備面でセキュリティが高いとは言い難い。男女共学校としてより安全で確実な防犯体制を構築していく必要性があろう。

本庄キャンパスには、早稲田大学の安全衛生委員会の下部組織としての本庄キャンパス安全衛生委員会が設置されており、本庄プロジェクト推進室長を委員長として本学院を始めとするキャンパス内各箇所から委員が選出されている。委員会は毎月定例で開催され、キャンパス内の安全衛生全般についての報告や安全対策の確認などを行なっている。11年度からは本学院教務室からもオブザーバーとして出席している。

③進級

本学院は卒業生は原則として全員早稲田大学に進学するという大学附属校であることから、進級・卒業基準を厳しく規定し、そのため原級生が多くなる傾向がある。11年度の前級生は1年生が6名、2年生が9名、3年生が5名であった。なお1年生のうち2名は休学、2年生の2名は留学による原級、その他は成績による原級である。10年度よりは1・2年生がそれぞれ2名、3年生が6名減少した。進級者は1年生は上記の6名を除く338名、2年生は9名を除く314名であった。

④生徒進路

a. 進学学部

11年度は326名が卒業したが、そのうち早稲田大学各学部への進学者は325名であり、進学学部・学科・専攻・専修は下表の通りである。第1志望の学部・学科・専攻・専修に進学した者は205名(63%)、第2志望までの学部・学科・専攻・専修に進学した者は253名(78%)であった。10年度より第1志望が14ポイント、第2志望までが10ポイント減少したが、これは法学部が第1志望の者のみを受け入れるという条件を撤廃したことが大きく影響している。数字上は志望学部への進学者が減少したことになるが、実質的には顕著な変化はないと判断できる。各学部・学科・専攻への進学者数は次の表の通りである。

学部	学科	専攻	専修	進学者数		
				男子	女子	合計
政治経済学部	政治学科			14	13	27
	経済学科			23	9	32
	国際政治経済学科			7	4	11
法学部				33	11	44
文化構想学部	文化構想学科			13	11	24
文学部	文学科			5	3	8
教育学部	教育学科	教育学専攻	教育学専修	4	1	5
			生涯教育学専修	1	0	1
			教育心理学専修	1	1	2
		初等教育学専攻		0	1	0
	国語国文学科			2	2	4
	英語英文学科			6	1	7
	社会科		地理歴史専修	4	0	4
			社会科学専修	8	2	10
	理学科		生物学専修	0	0	0
			地球科学専修	2	0	2
数学科			1	1	2	
複合文化学科			2	0	2	
商学部				24	5	29

基幹理工学部				23	2	25
創造理工学部	建築学科			3	1	4
	総合機械工学科			4	1	5
	経営システム工学科			6	1	7
	社会環境工学科			2	0	2
	環境資源工学科			3	1	4
先進理工学部	物理学科			2	1	3
	応用物理学科			5	0	5
	化学・生命科学科			3	0	3
	応用化学科			3	0	3
	生命医科学科			0	3	3
	電気・情報生命工学科			7	6	13
社会科学部	社会科学科			11	4	15
人間科学部	人間環境科学科			0	0	0
	健康福祉学科			0	0	0
	人間情報科学科			2	0	2
スポーツ科学部	スポーツ科学科			3	0	3
国際教養学部	国際教養学科			5	8	13
合計				232	93	325

b. 他大学進学

11年度卒業生のうち、昨年と同様2名が他大学を受験した。
また既卒者のうち、2名が他大学（私立大学医学部）に合格した。

c. 退学

11年度中に2年生2名、1年生3名が、それぞれ一身上の都合のため退学した。

Ⅲ. 研究活動

①教員の研究活動

a. 研究成果

個人による11年度の研究活動は次の通りである。

著書（単著） 1点

『コレクション日本歌人選『頓阿』』 笠間書院 12年1月

著書（共編） 1点

『五胡十六国覇史輯佚』 燎原 12年2月

論文（単著） 7点

「子供たちが意欲的に取り組める男女共修体育種目についての研究」

『日本私学教育研究協会委託研究員研究報告会研究論文集』 11年4月

「高台2001GLM1の記号的図像と補助文様について」

『西北出土文献研究』2010年度特刊 11年4月

「バングラデシュ農村部における村人の空間認知」

『アジアンレター』17 11年10月

「学校教育との連携による総合型地域スポーツクラブの運営・実践研究」

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』30 12年3月

「複素関数論入門(SSH)」授業実践報告」

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』30 12年3月

「三燕と烏桓」 『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』30 12年3月

「高校化学コンテスト問題と大学入試問題－結晶構造について－」

『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』30 12年3月

論文（共著） 3点

- 「埼玉県久喜市におけるコンテンツ・ツーリズムに対する住民意識」
『日本観光研究学会全国大会学術論文集』26 11年12月
「アニメによる観光振興に対する住民意識—埼玉県久喜市の事例—」
『早稲田大学本庄高等学院研究紀要』30 12年3月
「Decay of Resonance Structure and Trapping Effect in Potential Scattering
Problem of Self-Focusing Wave Packet」
『Journal of the Physical Society of Japan』80 11年8月

雑編 1点

- 劇評 「奥秀太郎作・演出・映像作品「白夜-BYAKUYA-」」
原美術館、NEGA 11年3月

コンサート 2件

- 「水無月コンサート」 本庄市
「ふれあいコンサート」 神川町

学会口頭発表（個人） 4件

- 「中高連携を考える—入試カテゴリー別にみる英語学習スタイルの違い」
田辺英語教育研究会 12年3月
「〈原発映画〉と文学—奥秀太郎監督「カインの末裔」・「USB」考—」
日本近代文学会秋季大会 11年10月
「他メディア化する有島武郎作品—奥秀太郎監督映画「カインの末裔」（2006年）・
「ドモ又の死」（2007年）を中心に—」
有島武郎研究会創立25周年記念大会 11年6月
「“十六国”与烏桓—特別以与三燕的關係為中心—」
中国魏晋南北朝史学会第十届年会暨國際學術研討会 11年10月（海外）

学会ポスター（個人） 2件

- 「Environmental Radiation Measurement in Honjo-City」
4th Network of Inter-Asian Chemistry Educators Symposium 11年7月
「Rutherford Scattering: Drawing Traces with a Set-square」
4th Network of Inter-Asian Chemistry Educators Symposium 11年7月

10年度に比して、著書（共編）が1点、論文が1点増加し、逆に雑編が2点減少し、他は変化なかった。

b. 学内研究費による研究

早稲田大学特定課題研究助成費を獲得した研究は次の通りである。

特定課題B	「現代韓国陶磁器における日本の「民芸」の影響」	500千円
	「鮮卑慕容部の形成と移動の研究」	500千円

IV. 教育研究施設

①教育環境

a. 施設

教室

教室は普通教室23、ゼミ室7、理科実験・講義室5、情報端末室2、美術・デッサン教室2、体育講義室2、地理演習室1、音楽教室1、家庭科室1、LL教室1、自修室1で構成され、そのうち一般視聴覚機器（テレビ／スクリーン、ビデオ／DVD再生）を備える教室は25である。

コンピューター・インターネット環境

PC室が2室設備され、また各教科教員室に大学側から各教員に貸与されたノートPCが置かれている。PC室は情報科授業・選択授業の他、授業で担当教員が必要と思われるときにその都度空きを確認して使用されている。放課後は生徒の研究活動のため解放

されている。本学院から大学へ専用線で結ばれており、帯域幅的には基本的にネット上のストレスはない環境にある。

体育館

学院体育館は耐震補強工事が行なわれ、それと同時にフロアの研磨・新しくラインを引き、整備された。残る問題としては、建物の構造上風通しが悪いこと、フロア面積が狭くバスケットボールコートを2面とって授業を行なっているが、ゴール裏がすぐ壁になり、生徒が激突する場面があること、ギャラリーの縁がフロアになっており危険であること、体育の授業をする上でフロア面積が狭く、雨天の場合 複数クラスでの授業が困難であることである。改善が求められる。

共通棟体育館には男女更衣室が2階にあるが、男子更衣室はほとんど使用していないことは問題であろう。

グラウンド

新校舎建設に伴い、テニスコートが6面（クレー4・オムニ2面）に削減され、ハンドボールコート2面は消滅した。サッカー場は十分な広さがあり、サッカーの授業には両広であるが、ハンドボールの授業をサッカー場で行なわざるを得ず、授業展開に支障をきたしている。また仮設の物置が設置されたが使い勝手は悪い。

ラグビー場・陸上競技場は十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができる。用具をコンテナで管理しているが体育用用具とクラブ活動用用具の整理をする必要がある。またラグビー場でサッカーの授業を行なうようになったが、グラウンドの整備が必要である。

野球場は十分な広さがあり、それを活かした授業展開ができた。整備・維持活動も的確に行われた。ただ台風のためグラウンドが水没し、野球場に置かれていたソフトボール・ゴルフ用具など多額の被害があった。

なお部室棟は各クラブの清掃・整理が徹底されていない点が問題である。トレーニングルームの使用状況はおおむね良好であった。

屋外施設全般について、トイレが少ないこと、水道が少ないこと、グラウンド内に倉庫がないこと等の問題点を指摘したい。

図書室

12年度から自修室機能を吸収した形での新たな運営を行なうため、11年度は図書管理システムの機器構成や資料配架の変更準備を行なった。現在の図書室のキャパシティに限りがあるため、自修室すべての機能を図書室で展開することはできないが、学校図書館として授業に密着したものとなるよう努めている。具体的には、検索端末を4台から5台へ、掲示版を2本から4本へ、授業用の黒板を2台にそれぞれ増設し、さらに授業が頻繁に行なわれる閲覧室の机と椅子をキャスター付きに入れ替え、様々な形の授業に対応できるようにした。

システム面では、2度のバージョンアップにより機能が増え、きめ細やかなカウンター対応が可能になった。さらにweb検索では紀伊国屋書店へリンクを張ったことで、検索結果に図書の画像が表示され、詳細な書誌データを閲覧できる環境ともなったことで、サービスの向上が実現できた。

保健室

構造上、出入り口が1つでしかもスペースが狭く、しかも生徒は大きな荷物を持って来室することが多いため、混み合うことがしばしばみられた。また窓が開かず、換気が不十分なため、臭気がこもりがちでもある。設置場所がグラウンドや共通棟から離れているため、そこで怪我や傷病を発生したした場合、対応に時間がかかるという問題点は解決できなかった。さらに歩行困難な傷病が発生した時のために車イスを常備しているが、階段、段差が多く、発症場所から保健室への移送、保健室から救急車まで移送に、時間と労力がかかるという問題点も残された。

食堂

食堂は、ホール・ラウンジ・会食室・パンショップ等から構成されている。生徒の食堂利用時間は、主に10時50分から11時10分コーヒープレイクと13時から13時40分の昼休みに集中する。08年度に約30席の座席増を行なったが、その時間帯の混雑は避けられない

ため、教室棟での食事も認めざるを得ない状況にある。
また自動販売機も設置している。

b. 校地

早稲田大学本庄キャンパスは埼玉県本庄市の郊外に位置する丘陵地全体を占め、その面積は 856.498㎡で、早稲田大学全体の敷地の45%を占める。キャンパスの北端に新幹線本庄早稲田駅があるが、11年度には本庄早稲田駅前整備工事が進められた。

c. 新校舎

11年度末の新校舎竣工まで以下のような準備が行なわれた。

前期：校舎の躯体部分の確定、配線・換気・配水にかかわる詳細設計確認。

後期：設備・什器・施設名称の懇談、各施設の用途と什器レイアウトの懇談。

什器の検討はかなりの量の提案資料のやりとりが学院の夏期休業期間とぶつかったため、提案時点で入念な検討ができたとは言えず、発注期日を過ぎてからの取り消しや追加でキャンパス企画部側と学院側双方に負担がかかってしまった。4科集合の教員室はレイアウトの検討が落ち着いてできたため、合同教員室でありながら4科それぞれのニーズがそれなりに満たせたものになった。12月21日の見学会（内覧会）、3月14日の竣工式を経て、年度末までに移転が完了した。

今後の課題としては以下のことが挙げられる。

1) 校舎外部および周辺

生徒の動線と車両の動線に十分注意を払った安全策

駐車場の拡充

夜間照明増設等の生徒の通学路の安全策

防鳥シートの影響の検討

2) 新校舎内部

掲示板、展示収納、部室の替わりとなる倉庫等の有効な活用の検討

より静穏な環境を保てるような施設の運用方法の検討

生徒間、教職員と生徒間、教職員間のコミュニケーションを促進できるような施設運用の検討

3) 教育施設全般

体育施設（準備室含む）、音楽科教室（準備室含む）、図書室へのアクセスや活用の検討

キャンパス内の他の施設の活用の検討

4) 第2期工事にむけて

設計計画の再開時に本学院側から説得力のある提案をするための準備

体育施設、講堂（大教室）、図書室設置のために他校視察のための予算措置の検討

d. スクールバス

朝日自動車株式会社に業務委託して、本庄駅・寄居駅と本学院を結ぶスクールバスを運行している。通常の授業期間には朝の登校時には10年度よりも1台増やし、5台のバスを使用した。5台のうち4台が本庄駅－本学院間、1台が寄居駅－本学院間の往復となっている。朝の時間に1台増やしたことで、10年度と比べ混雑は緩和されたが、雨天の日等は本庄便は乗りきれないことがしばしば起こり、始業時刻に間に合わない生徒も見られた。寄居便は10年度同様、ほぼ毎日定員（80名）ぎりぎりでの運行が続いており、約30分間満員状態の車内に閉じ込められていることに対して不満の声も上がった。

12年以降は生徒寮開設に伴い1台バスを増やすことになっているが、校舎移転によってバスの走行距離が拡大するため、朝のバスのタイヤがより過密になることが明白である。安全性を確保するためにも、バスの台数に余裕をもたせることが望まれる。

②生徒居住施設

a. ホーム

11年度において、生徒（男子）が入居している委託ホームは11軒であり、最終的には、第1学年61名、第2学年43名、第3学年41名が、委託ホーム最終年度を過ごした。

ホーム行事としては、バーベキュー大会（6月）、新年会（餅つき大会、1月）を実施した。これらの行事については、行事委員会委員長ならびに委員（ホーム生）の企画・運営のもと、恙なく実施された。

b. 生徒寮建設

12年3月5日、生徒寮が竣工した。生徒寮は、男子106名、女子30名を収容する規模を有する。このうち、開寮時点での男女比を勘案し、女子棟の1フロア10室を男子に充てることとし、結果として、男子116名、女子20名の定員でスタートすることとなった。男女のエリアはセキュティーによって、完全に分けられている。

当初の予定通り、住み込みの寮長・寮母に加え、食事を担当するスタッフが泊まり込み込みで寮運営にあたり、これを調理スタッフ・清掃スタッフで支える体制で臨むが、さらに教員の体制についても確認された。大学当局との折衝の結果、寮には寮生10名前後に対して寮担任1名を配し、さらにこれを総括する寮担当主任1名を配置することとなった。また、全専任教員による巡回指導を実施し、より手厚く生徒指導にあたる体制が築くことにした。その他、『寮生活の手引き』を作成し、寮規則の策定を行なったほか、緊急連絡体制を完備し、さらには2月中旬に決定した寮長・寮母との打ち合わせを経て、開寮に臨むことになる。

生徒寮建設の効果か、例年より海外や地方からの入学者が多くみられ、入寮者の選考は難しいものがあつた。しかし一方で、入学辞退者の中に寮希望者が含まれることも少なくなく、対応に追われた。

男子はホーム生の第1・2学年生のうち、78名が新生徒寮へ移り、これに新入生38名を加えた116名が寮生となる。女子は、新3年生1名、新2年生1名に加え、新入生11名が入寮の予定である。合計で129名が寮生となる。

V. 社会・大学との連携

①保護者との連携

a. 保護者会

11年度は6月と12月に保護者会を開催した。保護者からの土曜日あるいは日曜日における開催の要望に応え、いずれも土曜日に開催した。各保護者会は全体会、クラス別懇談会、個人面談という構成で行なわれ、6月には全体会の後にホーム保護者会が実施され、クラス別懇談の後には、ホーム毎のホーム保護者会を、12月には12年度の生徒寮開設に当たり保護者への説明を兼ねたホーム保護者会を実施した。保護者会には毎年9割前後の保護者が参加しており、保護者の関心の強さが窺える。各保護者会では保護者アンケートを実施し、本学院に対する保護者からの意見を聴取した。

b. 後援会

卒業生の保護者によって組織されている後援会は、5月21日（土）に大隈会館楠亭で総会が行なわれ、尾崎肇前学院長、山崎芳男学院長及び羽田一郎教務主任が出席した。総会では決算報告、予算案、事業計画等が承認され、本学院に関しては、後援会奨学金の創設が話題にのぼった。後援会の活動内容について、引き続き理解してもらう必要がある。

②卒業生との連携

a. 同窓会

同窓会との関係は良好で、同窓会役員会には本学院同窓会委員会委員長が出席している。11年度で創立30年が経過したが、それを記念して12年10月に「30周年記念式典」及び同窓生を招いての祝賀会（新校舎食堂）を開催し、また同窓生の文章を載せる小冊子を刊行することとし、費用の一部には同窓会からの支援金を当てることとした。30周年記念事業を行なうに当たって、同窓会との協力関係のさらなる強化が12年度の課題となるであろう。

b. ウインターセミナー

本学院卒業生と連携して12月10日（土）に実施した。進路指導委員会の各委員の推薦によって、本学院卒業生が講師を務める7つの講義を開き、加えて資格系予備校が主催する2つの講義を行なった。当日の各講義での運営は、サマーセミナーと同様に、1年生各クラスの世論・広報委員の生徒が担当した。

全般的に3年生の参加者が極めて少なく、1・2年生の参加によって受講者を維持できた講義が多かった。3年生への本行事への動機付けが求められる。また講義の配置に偏りがあったため、参加者が聴講を希望する講義が同一時間帯に行なわれることになってしまった。これらの点については今後の工夫が必要である。

講義終了後に行われた懇親会では、各講師と数名の教員を交えて、貴重な意見交換をすることができた。

③社会活動

a. 学会等の役員

学会等の役員として活動したものは次の2件（2名）である。

田辺英語教育研究会 研究企画委員
研究会「熱場の量子論とその応用」 世話人

b. 団体等の委員等

団体等の委員等を務めたものは次の6件（3名）である。

日本英語検定協会 面接委員
本庄市児玉郡合唱連盟 顧問
音楽ぐるうぷ「歌凶缶」 主宰
合唱団「北風」 指揮者
唱歌童謡サークル「赤とんぼの会」 指導
おおくぼ山スポーツクラブ 代表

c. 講演・学外講師

学外で講演したものは次の2件（2名）である。

「Tips for introducing yourself」

World Youth Meeting Pre-meeting 日本福祉大学 11年6月

「東アジア世界における三燕」

東アジアの古代文化を考える会 豊島区生活産業プラザ 11年6月

学外の講座で講師を務めたものは次の4件（2名）である。

本庄市市民大学講座講師
本庄市公民館唱歌講座講師
美里町教育委員会主催唱歌講座講師
スポーツ指導研究会講師

d. 施設の開放

セキュリティの関係から、校舎、体育館などの学外への貸与は行なっていない。ただ本庄市との歴史的な関係から、例外的に、本庄市民や中学校の陸上競技大会に陸上競技場を貸与し、（財）本庄国際リサーチパーク研究推進機構主催の多国籍料理居室に家庭科実習室を開放した。また市民のウォーキングコースやクロスカントリー大会にも協力している。

④外部資金の導入

a. SSH

SSHとして文部科学省から交付された予算は次の通りである。コアSSH枠を獲得したこととで19000千円的大幅増となった。

通常事業費	9000千円
コアSSH事業費	20000千円

b. 科学研究費補助金

11年度科学研究費補助金の応募は3件であり、そのうち次の1件が採択された。10年度に比して、件数は同じ、金額は170千円の減額となった。

奨励研究 「東西アジアの「境域」を探る」	300千円
----------------------	-------

c. その他

パナソニック教育財団から第37回実践研究として次の研究が採択された。

「8年間の海外交流校（インドネシア）と作り出す国際フリーパーパーグループスキルとネットワーク活用による国際協働学習モデルの構築を目指して」

500千円

⑤大学との連携

a. 教育実習

11年度は、10年度より実習生が少なかったが、2週間（5月30日～6月10日）の実習生を2名、3週間（5月30日～6月15日）の実習生を2名、9月に3週間の実習生を1名受け入れた。実習に先立ち、打ち合わせ会を設け、実習期間の初日には、オリエンテーションを実施し実習がスムーズに行われるように配慮した。教壇実習に限らず、体育祭の準備や当日の仕事も経験してもらい、広い教育活動の一端を経験してもらった。支障のない範囲で、放課後の課外活動にも積極的に参加してもらった。その結果、実習生は、充実した実習をすることができたと思っている。

b. 学部・大学院出講

学部・大学院での授業担当者は次の通りである。

教育・総合科学学術院	4名
スポーツ科学学術院	1名

c. その他

専任教員が早稲田大学体操部監督を務めた。

VI. 管理運営

①教員組織

a. 教諭会

11年度は、定例教諭会が11回（入試判定会、卒業・進級判定会は除く）、臨時教諭会が13回開催された。13回の臨時教諭会の中には生徒指導を議題とする会議が7回含まれる。11年度は、生徒指導を議題とする臨時教諭会の開催が、前年度より4回増加した。

会議時間の短縮化を意図したが、新教育課程の継続審議や生徒寮開設に関連して、毎回議題が多く、3時間を超える場合も数回あった。会議時間の短縮という目標の実現に向けて、提案方法の見直し、発言の簡略化、議事進行の迅速化等を引き続き図る必要がある。

b. 委員会

11年度は10年度と同じ14の委員会を組織とした。各委員会が1年間を通じてそれぞれの役割を果たしたと考えている。特に、新校舎の建設と生徒寮の開設に向けて、新校舎検討委員会とホーム委員会の開催回数が多くなった。また、SSH委員会は、「日本SSH・台湾HSP科学教育シンポジウム」の実行委員会の仕事も担った。各委員会の検討事項及び取り組みの主なものは次の通りである。

教科主任会

予算関係、定期試験における公欠の扱いの検討、指導要録の電子化に向けての取り組み、

- 新学指導要領実施に向けての検討。
- 学年主任会
 奨学生の選考、生徒表彰の選考。
- 生徒指導委員会（兼人権教育委員会）
 日常生活指導、学校における安全・安心確保への取り組み、人権教育（「携帯安全教室」）の実施、人権教育の実践報告。
- ホーム2011
 ホーム生の生活指導、生徒寮設置の検討。
- 広報・出版委員会
 『杜』・『研究紀要』の編集刊行。
- 情報管理委員会
 全般的情報の管理、授業評価の実施。
- 入試検討委員会
 『学院案内』の入試部分の作成、男女別・入試区分別募集定員の見直し、指定校の決定、αポイントの部分的見直し、学校説明会における個別相談の実施、各種入試説明会への参加。
- 新校舎検討委員会
 新校舎中央棟のレイアウトの確定、什器の選定。
- 進路指導委員会
 各種セミナーの立案及び実施、卒論報告会の準備及び実施、学部説明会の検討。
- 学校行事運営委員会
 体育祭、稲稜祭の立案及び運営、芸術鑑賞会の検討。
- S S H委員会
 S S H事業の立案及び実施、課外講義の実施、各種コンテスト・調査旅行への生徒引率、S S H報告会の立案及び実施、文部科学省への年度末（中間）報告。
- 国内外交流委員会
 Northside College Preparatory High School (Chicago)・N J C 来校時の対応、留学生の受け入れ検討、各種プログラムの引率。
- 学校評価運営委員会
 学校評価の立案、実施依頼、報告書の作成。
- 募金委員会・同窓会
 「30周年記念教育環境整備・充実募金」の企画と募金活動、同窓会活動への参加と協力。

c. 教科別構成

教科別構成は次の通りである。

教科	専任教諭	非常勤講師	合計
国語科	5	7	12
地理歴史・公民科	7	15	22
理科	6	6	12
数学科	6	9	15
保健体育科	5	5	10
芸術科	2	0	2
英語科	8	5	13
情報科	1	4	5
家庭科	1	1	2
第二外国語	0	6	6
人間科学	0	2	2
養護	1	0	1
合計	42	60	102

d. 年齢別構成

年齢別構成は次の通りである。

資格	人数	21～30歳		31～40歳		41～50歳		51～60歳		61～70歳	
		人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率	人数	比率
専任教諭	42	4	10%	11	26%	7	17%	11	26%	9	21%
非常勤講師	60	30	50%	11	18%	9	15%	6	10%	4	7%
全体	102	34	33%	22	22%	16	16%	17	16%	13	13%

e. 男女別構成

男女別構成は次の通りである。

資格	人数	男		女	
		人数	比率	人数	比率
専任教諭	42	36	86%	6	14%
非常勤講師	60	45	75%	15	25%
全体	102	81	79%	21	21%

11年度は専任教員1名の退職があった。常勤講師が多いのは、生徒定員増により授業時間数が増加したこと、退職した専任教員の後任人事を1年先延ばしとしたこと、また人間科学部提供のオンデマンド科目の担当教員（人間科学学術院専任教員）を本学院の非常勤講師扱いにしていることも大きな要因である。

男女共学校としては専任教員のなかの女性教員が少ないという見方もできるが、当面はこの体制に大きな変化は起こりえないであろう。

f. 持ち時間

11年度の教員の授業担当時間数は次の通りである。

専任教員	14.3時間
役職者以外	15.3時間
役職者	6.3時間
非常勤講師	6.1時間

②事務組織

事務職員の担当別人数は次の通りである。11年度と変化はないが、事務組織としての職員の配置数は十分といえる。箇所別の配置は次の通りである。

事務所	13名
事務長	1名
教務係	6名（専任職員4名・派遣2名）
庶務係	6名（専任職員2名・嘱託2名・派遣2名）
図書室	3名（専任職員1名・派遣2名）
理科準備室	2名
物理・生物	1名（派遣）
地学・化学	1名（嘱託）
自修室	3名（派遣、交替制）

おわりに

12年3月21日（水）から28日（水）にかけて、旧校舎から新校舎への引っ越しを行なった。大久保山の上の校舎から、大久保山の南の麓の校舎に移ったのである。引っ越しの際、30年間使用した旧校舎からは、生徒の成績表・答案用紙、諸会議の資料・議事録、古書籍、破損した機械器具等々、日項目にすることの少なかった、しかし本学院の歴史の一端を示すさまざまな文物が出現した。破損したもの、すでに耐用年数を過ぎたもの、保存義務年数を経た

もの等は廃棄された。また使用可能なもののなかにもスペースの関係から、新校舎に搬入することを断念したものも多々あった。

継続と断絶を経て、歴史は展開するのであろう。30年を取捨選択して、大きな歴史の転換を行なった本学院であるが、新校舎での新たな教育・研究活動の展開を期したい。